山口県の地域振興と国際協力(2)
ー阿武町の国際協力･･･いなかを知るー

辰己　佳寿子

要旨

本研究の目的は，山口県阿武郡阿武町の国際協力事業の2008年の活動を整理し，JICA本邦研修のアジア・アフリカからの研修員や，日本の地域振興と国際協力に興味をもつ都市在住日本人との交流が，受入側である阿武町の地域の振興に与える影響を検討することである。これらの事業は，阿武町の地域づくりにおいては一面であるが，2008年の活動をとおして，短絡的で受動的な事業ではなく，地域も学ぶ双方向の研修事業を目指す主体的な事業に変わってきたこと，集落単位で取り組む兆しが表われたこと，都市在住の日本人とのつながりが広がっていることなどの効果がみられた。

キーワード

いなか，集落，地域振興，国際協力，媒体者

１　国際協力は地域振興のひとつの手段となりえるのか

1.1　町長を泣かしたらいけん

「*みなさんは自分たちの首長を泣かしたらいけん，と思ったことはありますか？*」

2008年５月24日，国際協力機構東京国際センター（JICA東京）で開催された国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会は，この言葉で口火を切った。阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会の白松博之会長が会場に集まった人々に発した問いである。この背景には，「*町長を泣かしたらいけん*」といつもつぶやいている妻，白松紀志子さんの存在があった。白松会長はさらに話を続ける。「*みなさんは人口の多い都市に住んでいらっしゃるから感じることが少ないかもしれませんが，私たちの住んでいる阿武町は人口４千人弱の小さな町ですので，町長を泣かせたらいけん，と思って地域づくりを行っています。*」

阿武町は，平成の大合併が進められるなかで，単独町政を選択した。地域づくりは，阿武町基本計画をもとに，住民定住，コミュニティの活性化，交流促進，自然環境保全，交通整備，産業再生の６部門に重点をおいて進められている。交流促進に関しては，任意団体の「阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会」が中心となって，都市との交流を行っている。主な事業は都市との交流を行う「むらまち交流」であるが，2006年より，独立行政法人国際協力機構（以降「JICA」という）の本邦研修事業（以降「JICA研修」という）を受け入れることを契機に，外国人との交流事業も行うようになった。

1.2　問題の所在と本研究の目的

JICA研修に関しては，2007年６月，国際開発学会第８回春季大会にて「このままでは誰

も海外からの研修を受け入れなくなる」というテーマで，依頼側と研修受入側とのコミュニケーションギャップや，評判の良いところに集中豪雨的に依頼が殺到するなどの問題点が提示された。こうした指摘から，国際協力の名のもとで日本の地域を一方的に利用するのではなく，国際協力と日本の地域振興の双方の目的を持続的に両立させることができるのではないかということから，その年の秋，国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会が発足した。

この研究部会の成果のひとつとして，2008年6月国際開発学会第7回春季大会にて，「日本の地域振興への国際協力の可能性－依頼側の立ち位置からの比較検討－」（藤城2008），「日本の地域振興と国際協力における媒体者の関わり方－薄れていくウチとソトとの境界線－」（辰己2008）「国際協力事業と連携した地域開発－他の地域と連携することで－」（矢島2008）という３本の報告が行われた。これらの報告では，JICA研修において，依頼側と受入側との間に媒体者が存在する場合によりいっそう地域貢献的な研修活動が実施されたこと，媒体者も含め地域での実践過程を通じてアクター（数と種類とも）およびアクター間の関係が変容すること，研修員自身にも日本の農山漁村地域でフィールドワークする過程で態度変容が生まれること，国際協力の実践が長期的にみて地域住民の自信につながること，　JICA研修事業受入経験を契機に，住民自身による新たな組織形成による地域振興の実戦的取組が開始されたことが指摘された。

これらの報告に対して，コメンテーターの西川芳昭教授（名古屋大学）ならびに高橋基樹教授（神戸大学）からは，日本の地域にとっての国際協力の必要性の如何，既に国際化している日本の地域社会にとって国際協力による地域振興のみの不十分性，不可解性の付きまとう媒体者概念の成熟化の必要性，国際協力のアクターとしての研修員の地域振興に対する役割の如何，″Think globally, act locally″から″Act globally, think locally″への転換の必要性などの指摘がなされ，JICA研修事業受入先に対する報酬の有無の重要性，自治体国際化事業が既にイベント化している中で地域にとって国際協力とは何かを吟味することの必要性，日本の地域にとって既に海外の失敗を国内でも繰り返さないことが最低限必要といった議論が展開された（水野2008）。

本研究は，主に農山漁村を中心とした日本の地域振興における主流の取組，つまり，農林水産業の振興や地場産業の育成による地域活性化，グリーン・ツーリズムを含む観光振興，都市との交流事業などからは少し外れた国際協力という視点から日本の地域振興の可能性および限界を探ることを目的としている。

本稿では，本雑誌『大学教育』第５号に，2007年の阿武町の国際協力事業を整理した「山口県の地域振興と国際協力（1）－阿武町の国際協力・・・いなかに集う」（辰己・藤城2008）と同様に，2008年の研修に関わった個々人（阿武町民，行政，大学，JICA関係者・研修員ほか）が，阿武町という舞台で，内発的な刺激を受けたことにより，交流が質的に変化していくプロセスを時系列で整理する。2008年の動きを，2007年の「いなかに集う」から「いなかを知る」という変化として表現したのは，「知る」ということは，単に情報が増えることを意味するのではなく，相手を知り，自分を知ることを意味しており，そこから双方向の議論が始まり，互いの役割が見えてくる段階にあると捉えたからである。

本稿の構成は以下のとおりである。第２章ではこれまでの経緯を整理し，第３章，第４章では関東方面での阿武町の情報発信，第５章から第８章はJICA研修および派生的に生じた変化等をまとめ，最後に成果と課題について言及する[1]。

２　これまでの経緯と2008年の取組

阿武町では，個人的な外国人の受入は以前から行われていたが，国際協力事業として最初に実施されたのは，表１のとおり，2004年の国際開発コンサルティング企業の農村地域開発実習であり，その後，2006年に国際開発学会によるエクスカーションが行われた。これらは，日本の農山漁村の地域づくりや地域おこしにおける手法が，いわゆる途上国の農村開発にも適応できるのではないかということに興味・関心をもつ日本人が阿武町で研修を受けるというスタイルであった。これらの研修を通じて，阿武町では，地元の何気ないことが他の地域，それも海外で役に立つ可能性がある，つまり国際協力につながることが認識されるようになった。

JICA研修として外国人研修員の受入が始まったのは2006年６月の「農村女性能力向上コース」であった[2]。2008年11月に，「持続的農村開発コース」が加わり，合計７回の研修を引き受けている。

2008年には，同様にJICA研修を群馬県で引き受けているNPO法人自然塾寺子屋や，国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会の日本人との交流が新しく増えている。さらに，国際教育交換協議会（CIEE）[3]キャンプの受入により，外国人および山口県立大学の学生との交流も生まれている。国際協力事業と聞くと，外国人との交流のみが強調されるが，交流対象者である外国人には，必ず日本人がスタッフやオブザーバーとしてかかわっている。

以上のように，阿武町では，さまざまな交流事業が行われているわけであるが，本稿では表１の網掛け部分における，５月，７月，11月のJICA研修「2008年度持続的農村開発コース（阿武町に２回訪問）」や，５月，11月の国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会の活動，11月の山口大学共通教育科目「地域と出会う」の学外活動において生じた変化を時系列にまとめていく。

表１　阿武町の国際協力事業

年月	事業内容	主な交流対象	場所
2004年8月	農村地域開発実習（国際開発コンサルタント主催）	日本人	阿武町
2006年6月	国際開発学会第7回春季大会エクスカーション	日本人	阿武町
2006年6月	最初のJICA研修（農村女性能力向上コース）	外国人	阿武町
2006年9月	2回目のICA研修（農村女性能力向上コース）	外国人	阿武町
2007年6月	国際開発学会第8回春季大会企画セッション「国内フィールドを大切にしよう」	－	群馬県
2007年6月	3回目のJICA研修（農村女性能力向上コース）	外国人	阿武町
2007年11月	4回目のJICA研修（持続的農村開発コース）	外国人	阿武町
2007年11月	国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会設立	－	東京都
2008年4月	NPO法人自然塾寺子屋の阿武町訪問	日本人	阿武町
2008年5月	阿武グリーン・ツーリズム推進協議会の甘楽富岡訪問	日本人	群馬県
2008年5月	JICA筑波にて事前講義（持続的農村開発コース）＊「阿武町を知る」	外国人	茨城県
2008年5月	国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」第4回研究部会	日本人	東京都
2008年6月	国際開発学会第9回春季大会企画セッション「日本の地域振興と国際協力」	－	神奈川県
2008年6月	5回目のJICA研修（農村女性能力向上コース）	外国人	阿武町
2008年7月	6回目のJICA研修（度持続的農村開発コース）＊「阿武町を感じる」	外国人	阿武町
2008年8月	国際教育交換協議会（CIEE）国際キャンプの受入	外国人	阿武町
2008年11月	山口大学学生による「地域と出会う」授業の受入	日本人	阿武町
2008年11月	国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会，阿武町ツアー	日本人	阿武町
2008年11月	7回目のJICA研修（持続的農村開発コース）＊「阿武町を考える」	外国人	阿武町

注）＊は，同じ研修員が交流したことを示す。

３　阿武町と出逢う（５月23日）
：JICA筑波での事前講義

3.1　持続的農村開発コース2008年の特徴

JICAの本邦研修事業の集団研修[4]「持続的農村開発コース」は，2006年12月１日に筑波大学とJICAの間で締結された包括連携協定（５年間を予定）による取組のひとつである。筑波大学が有する豊富な人材の一層の活用と，同大の経験やネットワークを生かし，教育，環境保全・環境調和型開発，生命環境科学研究・生物圏資源科学の分野などでの課題対応型の協力案件の形成を目指し，アジア・アフリカからの研修員が16ヶ月間（うち日本滞在は，２～12月の10ヶ月間）の修学期間で農学修士号を取得する[5]。このコースの国内フィールド研修旅行として，熊本県水俣市や岩手県，山口県阿武町の研修が位置づけられている。阿武町での研修旅行では，研修員が地域のまちづくりを学ぶと同時に，その地域の課題解決に役立つ提言を行うことを目的としている。

このコースの研修員第１期生は2007年２月に来日し，10か月間の滞在の間，2007年11月に阿武町を訪問し研修を行った。ゆえに2008年の研修員は第２期生にあたる。2007年は，阿武町での研修旅行は１度だけであったが，2008年は，研修員が滞在している間に，阿武町の住民と３回（筑波１回，阿武町２回）ほど対面し，阿武町の地域づくりからそれぞれ母国の農村開発への示唆を徐々に引き出すための工夫を凝らしてある。１回目は，５月に阿武町の住民がJICA筑波に出向き，阿武町の概要や取組を説明し「阿武町を知る」というもので，２回目は，７月に研修員が実際に阿武町を訪問し「阿武町を感じる」というもの，そして，３回目は，11月に研修員が阿武町を再訪し「阿武町を考える」という計画であった。研修員は９名で，ガーナ２名，インドネシア２名，ザンビア２名，ケニア１名，マラウイ１名，南アフリカ共和国１名であった。

3.2　阿武町を知る（５月23日）
：JICA筑波国際センターでの事前講義

2008年５月23日，阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会の白松博之会長と農家民宿「樵屋」の女将の白松紀志子さん[6]，阿武町役場経済課商工水産係の高橋仁志係長，山口大学エクステンションセンター辰己佳寿子がJICA筑波[7]に出向き，阿武町の概要および取組について説明し，最後に２グループに分かれて質疑応答を行った。

このように研修員が阿武町に訪問する前に阿武町住民が研修員を筑波まで訪ねていくという企画が生まれてきたのは，2007年の研修において関東圏のつくば市のJICA筑波で日常生活を送っている研修員が，本州の最西端の山口県の農山漁村に訪問して農家に滞在する研修に慣れるまでに時間がかかってしまったからである。ゆえに，事前講義の大きな目的は，阿武町住民の代表が研修員に会いに行き，研修員の緊張をほぐすことであった。

阿武町側の最初の関心は，研修員が10ヶ月の日本滞在の大半をどういうところで学び，生活しているのかということであった。JICA筑波では各自の部屋があり，主に食堂で食事をとっている。食堂には日本食のメニューがあるものの，彼らの日常生活全般においては，日本の生活・文化に多く触れているわけではないので，農家・漁家民宿で雑魚寝，共同風呂・トイレ，畳の生活，田舎料理，コンビニエンスストアーのない阿武町での研修生活は研修員にとってかなりのカルチャーショックになることが認識された。

紀志子さんから研修員への問いかけは，どのような食事をしているのか，どういう日本料理なら食べたことがあるのか，食べられないものは何か，どのような食事，またはどういう料理方法なら食べられるのかというものであった。「*女将はみんなの胃袋をあずかるんですから。食事が一番神経をつかいますよね*」という紀志子さんの言葉に象徴されるよ

うに，プログラムの内容もさることながら，食事は研修においては最も重要な要素となる。

JICA筑波での事前講義が始まったころは，研修員も阿武町側も緊張感を隠せなかったが，次第にうちとけ，別れる際には，白松会長を「お父さん」と呼ぶ研修員もいた。そして，７月の再会を誓って別れたのである。

3.3　組織人として，ひとりの人間としての阿武町とのつながり

JICA研修においては，外国人研修員だけでなく，JICAやJICE[8]職員などの日本人スタッフ（コーディネーター，通訳等）もかかわっている。しかしながら，JICAでは，2，3年で担当部署が変わるため，地域との信頼関係等が，社会関係資本として次の担当者や担当部署および組織に蓄積されない場合もある。地域側からみれば，担当者が変わったことにより，「やり方が変わった」「信頼関係を築くことからやり直さなければならない」「信頼関係を築くためのコストが無駄になった」と捉えられ，本来ならば進展する事業が足踏み状態になることがある（時には後退する場合もある）。

このような傾向がみられるなか，持続的農村開発コースにおいても，昨年のJICA職員の担当者が交代した。どのような引き継ぎが行われるのか，新しい担当者がどのようなオリジナリティを加えていくのかというのが今後の着目点であろう。

ただし，担当者が交代すれば自動的に関係が切れるわけではない。５月23日のJICA筑波での事前講義の際には，前任の根崎俊さんが懇親会に駆けつけて，白松夫婦との再会をはたした。また，JICA筑波の藤城一雄さんは，担当者ではないが，持続的農村開発コースの研修旅行を立ち上げた仕掛け人として現在でも信頼関係を築いている。つまり，組織人としての阿武町とのかかわりから，ひとりの人間としてのかかわりに変化しているのである。

JICA研修にかかわった日本人がひとりの人間として阿武町にかかわっていく「つながり」の変化は，研修の波及効果として捉えられるのではないだろうか。このような関係は，阿武町に限定されるものではなく，長崎県小値賀町とJICA九州との関係においてもみられる[9]。

４　阿武町を広める（５月24日）：JICA東京の研究会で講演

4.1　日本の地域振興と国際協力をどうつなぐか

JICA筑波での事前講義の翌日の５月24日には，表２のとおり，国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会の第４回研究会で「山口県阿武町の地域振興と国際協力」をテーマに阿武町の活動が取りあげられた。研究会の目的は，阿武町の活動を広めるとともに，阿武町と同じようにJICA研修を引き受けている地域が，今後どのように国際協力を地域振興の手段として活用できるのかを検討することであった。本稿の冒頭部分（第１章1.1）で紹介した言葉から始まった研修会は，44名の参加者のもと活発な議論が交わされた。

まず，山口大学の古賀学長特別補佐より，日本の地域振興と国際協力は一見異なることのように捉えられるが，そうではなく，人間として普遍的に共通する部分があると問題提起があった。これらを踏まえて山口大学エクステンションセンターの辰己は，JICA研修やまちづくりをとおして，「依頼側（A）と受入側（B）」の上下関係が見えてくる。この構造は，JICA研修に限定された問題ではなく，日本国内の地域開発を行う際，日本人がいわゆる途上国で国際協力を行う際，研究者がフィールドで調査を行う際などでも生じる可能性をもつ共通課題である。「都市(A)と農村(B)」の関係において，(B)は常に「消費される」「従属する」と捉えられがちであるが，そうではない。この発想を転換して「むら

(B)まち(A)交流」行っているのが阿武町である。それぞれの地域が双方向の関係をもち，共に影響を受けあい，変化していけないかという可能性をJICAの研修に見出したい，という試みが阿武町の挑戦であると主張した。

4.2　阿武町の抱える課題と展望

次に，白松会長が，阿武町が抱えている問題や課題を阿武町代表として整理した。いろいろな研修を引き受ける中で，とまどいや意見の違いも感じており，研修の中には，十分な説明がなかったり，責任の所在がわからなかったり，何のためにやるのかという趣旨が明確でない研修がある。ゆえに，もっと受入側と依頼側の両方の話し合いが必要ではないか。何年も続けるのであるならば，受入側のメリットがなければ，受けていけないのではないか。依頼側と受入側の意識や目線の違いを，きちんと埋めておかなければならない。

そして、共に必要とされる関係こそ，共に成長できるため，「教えてあげる」ではなく「私達もあなたたちから教えてください」という阿武町側の姿勢も大切である。また，表面的に施設をみる見学ではなく，農山漁村が持つ知恵を見てほしい。あいだを取り持っている日本人も，そして，研修員も，戦後の日本の復興の中でどのように農山漁村の知恵がいかされてきたのかを見て欲しい。そうすることで私達もその知恵の再認識することができる，との報告であった。

4.3　元住民からみた阿武町

この研究会には，コメンテイターとして，元阿武町住民，新規就農定住者として阿武町に８年間定住していた山本郁夫さんが出席した。山本さんは，阿武町の国際協力事業の最初の仕掛け人である。表１の2004年８月の農村地域開発実習から４年，阿武町の国際協力事業がこのように展開しているとは想像していなかったようであるが，当時の様子を語ってくれた。「*私は，国際協力プログラムをやるために，阿武町へ行ったわけではなくて，農業をするために阿武町に行ったわけですが・・。農業と所属していたコンサルティング会社の兼業をしており，会社の方からこういうプログラムをやりたいという話がありました。その時，私自身は，正直，やりたくはありませんでした。なぜなら，私はそこに住んでいる身でしたから，やった後に気まずい思いをしたくないと思ったからです。*」

全国的に，農山漁村の地域活性化事業がイベント化していくなかで，農山漁村には様々な依頼が舞い込む。地域から内発的に生まれた事業よりも，よそ者による外発的な事業が多い。後者は，事業の評価を吟味することなしに，また別の場所に移動する傾向が強いが，よそ者であったとしても，山本さんはそこに住んでいる立場から，打ち上げ花火的な事業を持ち込むことには慎重であったことがこの発言から読み取ることができる。

「*開発研修プログラムというのは，これか*

表２　国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」第４回研究部会

日　時：2008年5月24日（土）14：00－17：00	場　所：JICA東京　セミナールーム15
共　催：山口大学	後　援：阿武地域グリーンツーリズム推進協議会
＜報告テーマ・発表者＞『山口県阿武町の地域振興と国際協力』	
「国際協力と地域振興をどうつなぐか」：古賀大三（山口大学学長特別補佐　国際・社会連携担当）	
「山口県のムラから何をみるのか」：辰己佳寿子（山口大学　エクステンションセンター　准教授）	
「地域が学べる国際協力」：白松博之（農家民宿「樵屋」大将）	
「かあちゃんの触れ合い哲学」：白松紀志子（農家民宿「樵屋」女将）	
＜コメンテイター＞	
高橋仁志（阿武町役場経済課商工水産係　係長）	
山本郁夫（アイシーネット株式会社代表取締役、元阿武町民　開発実務実習世話人）	
藤城一雄（国際協力機構筑波国際センター研修業務課主任、阿武町JICA本邦研修仕掛け人）	

ら開発援助の世界でプロフェッショナルになろうという人たちの研修を提供するという趣旨です。日本の地域の中で，開発のプロフェッショナルを育てることをどういうふうに位置づけるかが第一のテーマだったわけです。日本の地域そのものを学ぶことと，途上国の地域を学ぶことと，基本的には同じではないかという発想があって，そのためのツールを勉強する機会を，阿武町でやってみようという話になりました。」

この農村地域開発実習では，日本の地域と途上国の地域において根底で通じるものを発見するという理念があったといえる。つまり，現在のJICA研修で阿武町が模索している双方向の学び合いという考え方は，当初から続いていたのである。

ただし，国際協力事業が本当に地域のためになるのかという点については，「*今でも我々がやったことが，阿武町にとって何か良かったのかというのは疑問に思っています。やること自体は非常に良いと思うのですが，外国人を連れてきて町の役に立つのかなということは，私自身も懐疑的になっているところです。では，やらなければよいのか，というと，そうではないと思っています。やりながら走りながら，良いものにしていけばよいと思います。*」と山本さんは述べている。事実，JICA研修は，阿武町内でも全面的に賛同されているわけではない。これらは，阿武町が主体的に考えていかなければならない課題であろう。

表３　JICA研修プログラム「持続的農村開発コース」１回目の訪問（7月14～17日）

	予定時間	研修内容	場所
一四日	16:00～	萩農林事務所表敬訪問	萩農林事務所
	17:00頃	到着後、それぞれの宿でオリエンテーションほか	ふれあいセンター
	18:00～	食事研修・世界一の長寿国ＪＡＰＡＮ・長生きの秘密は日本食にありＶｏｌ．１	農家民宿「樵屋」
		郷集落は食事後､西村さんを座長に集落住民とディスカッション開催「睦笑会の活動」	農家民宿「一服庵」
		その他もそれぞれディスカッション「農山漁村の暮らし①－漁師の哲学・樵の哲学」	漁家民宿「いかり」
一五日	9:30～9:50	阿武町役場(町長)表敬訪問、庁舎内見学	役場
	10:00～11:30	町長、議員、会員、町民、法人、県職員、町職員らとの質疑応答、意見交換ほか	
	11:30～12:00	町民センター見学	文化ホールほか
	12:00～13:00	昼食	道の駅・憩
	13:00～14:30	道の駅の概要、問題点、動き、施設(漁港含む)見学	道の駅
	14:30～15:00	奈古の街並み散策	奈古浦
	15:15～16:15	山口県外海第2漁業栽培センター視察	センター
	19:00～	世界一の長寿国ＪＡＰＡＮ・長生きの秘密は日本食にありＶｏｌ．２	農家民宿「樵屋」
		郷集落は食事後、西村さんを座長に集落住民とディスカッション開催「睦笑会と郷集落」	農家民宿「一服庵」
		その他もそれぞれディスカッション「農山漁村の暮らし②－夫婦二人三脚のコツ」	漁家民宿「いかり」
一六日	9:00～11:30	農事組合法人「うもれ木の郷」研修	うもれ木の郷
	11:45～12:00	サプライズタイム(保育園児のお出迎え)	福賀保育園
	12:00～13:00	保育園児とお食事（流しそうめんとオードブル）	
	13:00～14:30	小地域福祉サービス事業所「えんがわ」視察(施設が作られた背景や狙い等)	えんがわ
	14:30～16:00	地域医療の現状(過疎地での医療について)	福賀診療所
	16:00	農家民宿樵屋に移動・食事	樵屋
	18:00～20:00	福賀・保小学生､保護者とディスカッション「世代／国境を越えたまちづくりミニシンポジウム」	樵屋
一七日	8:30	ソバ植え体験(※11月研修時に収穫、そばがき体験)	樵屋横の畑
	9:30～11:00	ふり返り及び１１月研修の課題検討	のうそんセンター
	11:15	研修生との再会を誓ってお別れ	
	13:00～15：00	ＪＩＣＡ職員、阿武町関係者と次回に向けての協議	

５　阿武町を感じる　（７月14～17日）
：研修員の阿武町訪問１回目

5.1　研修のねらいと内容

第２期生の研修員が初めて阿武町に訪問したのは夏の暑さが盛りになった7月であった。この研修は１回目の訪問であるため，「阿武町を感じる」というテーマで，表３の，プログラムが組まれた。

まず，山口県萩農林事務所を表敬訪問し，その後，阿武町民が研修員を出迎えた。到着は夕方であったため，９名の研修員は，３グループに分かれてそれぞれの宿に分かれて，夕食をとることとなった。今回の特徴は，夜の交流会の内容は各宿および集落に任せ，それぞれが工夫して準備することであった。１泊目，２泊目の宿泊場所をローテーションすることで研修員全員が農林漁家民宿を体験できるように組まれていた。たとえば，萩市須佐の漁家民宿「いかり」[10]では，大将の川口勝美さんがイカの水揚げを研修員にみせてあげようと準備をしていた。しかしながら，研修時間が大幅に遅れたためにみせることができなかったのである。時間配分および連絡網の不備が，大きな反省点となった。

そのほか注目すべき点は，郷集落の動きであった。研修の受入は，阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会が引き受けて，プログラムを作り，町内に依頼するという流れをとっており，これまでは，一部の組織・団体や個別農家，個人が請け負うかたちであったが，このたびは，集落単位で請け負うという新しい動きがでてきたのであった。

5.2　郷集落の挑戦

郷集落で，JICAの研修を引き受けるのは今回で２回目であった。１回目は，2008年６月の女性能力向上コースであった。この時には，「一服庵」という農家民宿（大将　西村浩一さん，女将　良子さん）が単独で宿泊・食事を引き受けた。一服庵の開業は2006年９月30日で，阿武町で３番目に開業した民宿であるが，兼業等の理由から稼働率が低かったため，日本人客に対しても試行錯誤の状態であった。そういう状況下で，外国人を初めて受け入れたこともあり，どういう習慣や文化を持った人たちがくるのか，どのように対応したらよいのかという戸惑うことばかりだったという。「どうにかなる」と引き受けたものの，結果，一服庵の売りとしている田舎料理にはほとんど手がつけられない状態であった。これらの苦い経験から，西村さんは外国人の引き受けには消極的になっていた。しかし，西村さんの背中を押したのは郷集落の仲間たち，睦笑会であった。「*そのような面白い企画があるんなら私たちも参加してみたいし，料理は工夫次第で食べてもらえるはず。西村さんだけで引き受けると大変じゃから，私たちも手伝うからやってみようよね*」ということで，７月の持続的農村開発コースも引き受けることとなったのである。

料理は，郷集落にある，ふれあいセンターの調理室を利用して，みんなで知恵を出し合いながら作り，唐揚げや近くの千鶴のパン工房のパン，洋風のスープ，豆料理，サラダなど，工夫が凝らしてあり，研修員はおいしそうに食べていた。夜は，会議室で集落住民と研修員との交流をはかりながら，夕食を食べるというかたちをとり，この時には，ひとり暮らしの高齢者も出席していた。研修員には，郷集落の連帯の強さが伝わったようであった。

郷集落での夜の交流会

「一服庵」の大将の西村浩一さんは，「*アフリカは遠いと思っていたが，研修員と交流できて距離が近く感じ，いい勉強をさせてもらった。これを機にもっと勉強したい*」と話していた（JICA2008C）。

阿武町のJICAの研修は一部の住民たちだけで実施されているので，阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会の課題は，質の向上と面的広がりである。受入に慣れているところには依頼しやすいが，それでは面的な広がりは望めない。外国人を受け入れるという特殊な企画の場合は，通常の企画以上に，不慣れな集落，住民へは手厚いサポートが必要であろう。

ゆえに不慣れであっても集落単位で取り組んだ郷集落の挑戦は，画期的な動きであった。といえる。特に，これまでの請け負い単位であった，個人や農家，団体ではなく，「集落」としての取組であったことは注目に値する。なぜなら，現在，集落の機能を復活させようという動きがあるなかで，集落で取り組む企画が増えるほど連帯感が高まるからである。また，研修員にとっても，農村開発の背景には，必ず社会の地域性がかかわってくるため，日本的でインフォーマルな集団形態のひとつである集落の機能を目の当たりにしたことは大きな学びであったと考えられる。

６　阿武町に触れる(11月15～16日)
：山口大学の学生がみた惣郷集落

2008年度，山口大学では「地域と出会う―地域とともに自主活動」（辰己担当）という一般共通教育の総合教養科目を開講した。当初は，阿武町をフィールドとして，地域資源を発見し，学生の視点から地域づくりへの提案を行うことが目的であった。まさに，JICA研修と同様の目的である。ゆえに，JICA研修期間の11月26日に，この講義を組み入れて，学生からみた視点と研修員からみた視点で阿武町の提言をして，相違点を通して，阿武町の地域づくりの示唆を提示するという企画を立案するに至った。

まず，11月５日，阿武町役場と惣郷集落に挨拶に赴いた。役場では総務課の金田浩祐さんと経済課の羽鳥純香さんが学生たちの説明に耳をかたむけてくれた。

山口大学の学生たち４名は，11月15～16日の１泊２日で惣郷集落の調査を行った。16日には，茂刈克巳さん，茂刈接佐さん，藤村京子さん，堀山包一さんが学生たちの疑問に答えてくれた。彼らは集落の閉鎖性を感じ，そこによそ者（全て山口県外出身者）の自分たちが入っていくということから，チーム名を「チーム黒船」と名づけたのであったが，実際に，阿武町の惣郷集落を歩き，空気を吸い，住民と話してみると，「*みなさん開国されていて，話をしてくれたり，答えてくれたり，すごく楽しかったです。いなかは自然がいっぱいで，開放的ですごく楽しい時間を過ごせました。*」（教育学部４年荒谷亮輔）と最初の印象を撤回することとなったのである。

そこで，次に学生たちに湧いてきた疑問は，「*私たち“よそ者”にいったい何ができるのか*」「*“開発”とはいったい何なのか*」「*あたり前に良いことだと思われている“開発”や“発展”というのは，絶対的なのだろうか*」ということであり，「*数日間の滞在ではお役には立てない・・・*」「*お役に立とうとしたこと自体が傲慢だったかもしれない・・・*」「*実は自分達が考えていたよそ者が提案することはおこがましいのではないか*」ということを痛感することとなった。

11月26日に研修員や惣郷集落のみなさんの前で発表することは決まっていたため，何をどういうふうに発表するかを再検討しなければならなかった。結局，役には立てないかもしれないが，11月５日，15日，16日に学生が惣郷集落で時間を過ごしたことは事実であり，そこで感じたこと思ったことを正直に等身大で話すことになった（第８章へ続く）。

７　阿武町に帰る(11月23～24日)
：国際開発学会会員の再訪問

11月23日と24日，11月25日から始まるJICAの「持続的農村開発コース」研修受入に先立つかたちで，「日本の地域振興と国際協力」研究部会のメンバー12名が阿武町を訪れることとなった。「いなかと出逢う」と銘打って2006年６月に国際開発学会として実施した山口県阿武町でのエクスカーションから２年半が経過したこの訪問では，半数が再訪問者で

表４　JICA研修プログラム「持続的農村開発コース」２回目の訪問（11月25～29日）

	予定時間	研修内容	場所
二五日	9:40～	「萩しーまーと」(活発な「道の駅」) 来場者数中国地方で１位，全国で売り上げ５位の成功している道の駅をみて，阿武町の道の駅と比較する。卸売市場の見学も可。	道の駅 「萩しーまーと」
	12:45～15:00	町長表敬。阿武町役場での行政 行政の視点からみた道の駅および集落再生の概要、各地区における集落の特徴説明	阿武町役場
	15:00～16:00	A班・B班に分かれて作戦会議	
	17:00～	各民宿へ移動（夕食、風呂、就寝），農家民宿「樵屋」漁家民宿「浜の小屋」	
二六日	A班：道の駅プロジェクト		
	9:00～12:00	現状把握（マーケティング，運営，役場や住民の関わり方），現地調査	阿武町道の駅
	13:10～14:00	地元の公立高校：奈古高校生への研修員出身国紹介　４つの班に分かれて聞く	奈古高校
	14:20～15:20	奈古高校生や現地の方と一緒に奈古地区のあるもの探し	道の駅→町中
	15:30～16:30	A班研修員の振り返り	阿武町役場
	B班：集落再生プロジェクト		
	9:10～ 9:45	大刈集落（ハードな開発が実施された集落）→御山神社→畑集落（開発の恩恵を被らなかった集落）→惣郷公民分館	
	9:45～10:15	惣和会（地域サロン）の成り立ちや活動等の説明	惣郷公民分館
	10:15～11:30	茂刈芳子宅（空き家バンク）見学，消防機庫見学，鶴惣工業見学	
	11:30～12:30	神楽の説明と神楽舞	
	12:30～14:00	昼食（惣郷公民館で弁当）女性起業家による昼食	
	14:00～15:10	山口大学学生からみた惣郷集落について発表・ディスカッション	
	15:30～16:30	B班研修員の振り返り	ふれあいセンター
	17:00～	各民宿へ移動（夕食、風呂、就寝），農家民宿「樵屋」漁家民宿「浜の小屋」	
二七日	A班：道の駅プロジェクト		
	9:00～10:00	道の駅を船上から考える（現地踏査）	漁船ー未
	10:00～12:00	道の駅関係者とコンサルタントとのミーティング 道の駅を担っているコンサルタント（中小企業）と道の駅の関係者とのミーティング。	阿武町道の駅
	12:00～14:30	道の駅「田万川」見学（活発な「道の駅」）	道の駅「田万川」
	14:30～16:30	追加調査、研修員の振り返り　及び　発表準備	ふれあいセンター
	B班：集落再生プロジェクト		
	9:00～11:30	樵屋⇒宇生賀を通って森をみる⇒あったか村（消滅した集落に新しく集落を作る取組）	あったか村
	12:00～13:00	昼食　宇田地集落女性が作られた食事をしながら交流	宇田地集落集会所
	13:00～14:30	新規移住者（上沢さん，他）および定住者とのディスカッション	上沢邸
	14:30～16:30	追加調査、研修員の振り返り，発表準備	のうそんセンター
	17:00～	各民宿へ移動（夕食、風呂、就寝），農家民宿「樵屋」漁家民宿「浜の小屋」	
二八日	9:00～10:00	発表準備	阿武町役場
	10:00～12:30	発表と意見交換(なるべく住民の方や役場職員，道の駅関係者に出席してもらう)	
	14:00～14:45	福賀小学校で交流。自国紹介　(移動15分)	福賀小学校
	15:00～16:00	福賀中学校で交流。そばがき作り	福賀中学校
	16:30～	お別れパーティ，全員樵屋宿泊（夕食、風呂、就寝）	樵屋
二九日	9:00	研修員はバスにて出発	
	9:30～14:00	関係者のみ残って反省会	のうそんセンター

あった。

この訪問では，①農家民宿「樵屋」の地域のリーダーと民宿のかあちゃん夫婦，②新規定住者（Iターン）のグラフィックデザイナーと自然体の学芸員夫婦，③農家民宿「一服庵」の元農業改良普及員と元生活改良普及員夫婦，④漁家民宿「浜の小屋」のUターン漁師と元ハウスマヌカンの女将夫婦という，それぞれのかたちをもった４組の夫婦との出逢いに重点が置かれた。参加したメンバーがそれぞれかかわる国内外の地域への想いを馳せて，人づくりとはなにか，地域づくりとはなにかを考えることとなった（国際開発学会2009）。

この訪問に引き続いて，11月25日より，３名の日本人（澤池多恵子さん，桑垣隆一さん，長山悦子さん）がJICA研修の通訳補助およびオブザーバーとして５日間の研修をともにし，研修員はもちろん，阿武町が変化していく現場に立ち会うこととなった。

JICA研修の受入は，海外からの研修員との交流だけではなく，このように研修にかかわる日本人との様々な人間模様からも，地域が学び，変化していくきっかけが生まれているといえる。

８　阿武町を考える（11月25～29日）：研修員の阿武町訪問２回目

8.1　研修のねらいと内容

持続的農村開発コースは，５年間続くとされているが，毎年，研修員の顔ぶれが変わる。研修員が変わるたびに単発的なイベントで終わるのではなく，阿武町側の継続性および戦略が必要である。つまり，研修員の提言は，短期間の滞在で表面的な指摘かもしれないが，それをどう受け取り，どう活用するかは阿武町にかかっているという認識が阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会には芽生えていた。ゆえに，11月の研修では，これまでのように「見学」で終わるのではなく，研修を活用して，阿武町の核となる問題にアプローチするプロジェクト型を採用することが妥当であるとの結論に至った。

そこで，ひとつのプロジェクトとして，阿武町で共通認識となっている「道の駅」問題をとりあげることとなった（Ａ班）。阿武町の「道の駅」は全国に先駆けてできたが，現在は，周囲に別の道の駅ができ，そちらの方が活性化している（辰己2006）。そこで，萩市の「萩シーマート」（来場者数中国地方１位，全国で売上５位）と「田万川」の道の駅を見学して，成功例と比較しながら，阿武町の道の駅について考えることとなった。

もうひとつは，集落再生プロジェクトである（Ｂ班）。日本では，行政村とは異なる集落という単位があり，そこでの相互扶助が長い間集落を守り，維持し，発展させる機能をもっていること，今，その集落が消滅の危機にさらされていることを認識し，再生するためのアイデアを集落の住民と一緒に考えるというプロジェクトである。①ハードのインフラ整備が整っており「開発」の恩恵を受けたところ，②「開発」の恩恵を受けていないところ，③福祉協議会等の福祉サロンが始まる前から集落を単位とした会を中心に相互扶助的な活動をしているところ，④すでに消滅してしまった集落に新しく村を作ろうとしているところ，これらを比較することにより，それぞれの集落のあり方を考えるという意図になっている。

表４のとおり，２回目の訪問では，研修員がふたつのグループに分かれて道の駅プロジェクトと集落再生プロジェクトに挑むこととなった。

8.2　企画に籠められる住民の想い

プログラムを組み立てる際に，阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会としては，受入慣れている団体や農家，個人に頼むのか容易であるが，それでは，阿武町内での面的な

広がりにはならないため，部分的に挑戦的な企画を組み入れることとしている。今回の挑戦は，惣郷集落への依頼であった。

集落単位への働きかけは，７月の研修で郷集落の活動から生まれてきたものである。惣郷集落を選んだ理由は，惣和会の活動が活発であったことに加え，以前，広報課に属し町内を取材で回っていた役場の高橋さん（現経済課商工水産係係長）の「*集落に伝わる神楽をあのまま埋もらせてはいけない，地域外の人に知ってもらうことによって，必ず継承しようという意識が地元に芽生えるはずだ*」という想いも強く働いた。神楽は基本的に口頭伝承であり，厳しい練習を経て集落の成員として一人前（男性のみ）になったと認められる社会的な意味をもっている。昨今，後継者が少なく神楽を舞う地域は減少傾向にあるが，惣郷集落では神楽舞が現在でも受け継がれているのである。

なお，惣郷集落への依頼が決まった後，第６章で触れた山口大学の学生のプロジェクトも同時進行で実施することとなった。

サプライズ企画としては，「道の駅を船上から考える」というテーマで，奈古連合船団（代表　国近照夫）の漁協を出し，クルージングを行ったことである。研修員は，筑波では，修士論文を作成するのに毎日忙しい日々を送っている。そもそも阿武町は「ホッするね，阿武町」というキャッチコピーがあるように，癒される空間であるはずなのに，研修内容が目白押しで研修員は，阿武町にきて癒されているのだろうかとの声があがった。

そこで，阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会副会長兼漁師の茂刈達美さんは，ひと息つける演出が必要と考え，海風に吹かれ海側から道の駅を考察する漁船クルージング企画を提案した。JICA側は，事故があった際の危機管理が優先して躊躇していたが最終的にはプログラムに組み込まれることになった。茂刈さんは「*漁船クルーズは漁師のホスピタリティーのひとつ。この企画は賭けに出たんだ。もしだめだったら俺はこの研修から全て手を引く覚悟で提案したんだよ*」と述べている。

研修は，人々が生活している社会で行われるため，工場見学とは異なる。大小関係なく，プログラムのひとつひとつの企画に，住民の想いが籠められているのである。

8.3　惣郷集落の挑戦

現在の阿武町は，昭和30年に奈古町，宇田郷村，福賀村の３つの町村が合併した行政村であるが，その中には56の集落がある。住民が「地域」という場合には，阿武町を指すのか，旧村なのか，集落なのか，それぞれに意味合いが異なるので見極める必要がある。

集落という単位は，人々の暮らしに密着しており，なかには，インフォーマルリーダーとしての「総代」という役をもっている集落がある。

惣郷集落への依頼は，役場を通して，集落の見学，惣和会の活動の紹介，地域の食材で作った昼食会，神楽舞の披露，山口大学学生と研修員と集落住民との交流について，総代の茂刈克巳さんへの打診からはじまった。その後、惣郷集落からの快諾を得たが，どのような展開になるかは誰もわからなかった。「*私たちはただ暮らしてきただけなのに，私たちと交流することが研修員にとってどういうふうに勉強になるんだろうか*」という声も聞かれた。まさに，筋書きのないストーリであった。基本的にプロジェクトというのは，目的とプロセス，到達点がほぼ予想される状態で動き出すものであるが，阿武町流の集落再生プロジェクトは試行錯誤であった。

当日，様々な心配は払拭され，惣郷集落が筋書きをありのままの姿で作ってくれた。これが阿武町の地域力なのかもしれない。10人も集まれば良いと考えていたが40人程度の人々が集まり，惣和会のお世話をしている藤

村京子さんが，全員にワープロ打ちで名札（ローマ字を含む）を用意していた。藤村さんは，となりの集落から嫁いで数十年になるが，いまだによそ者としての意識をもっており，よそ者として何ができるのか，役場に足繁く通い，情報を収集したり，アドバイスを受けて，役場や外部との媒体者となり，惣和会の仕掛け人となっている。

山口大学の発表では，等身大の学生が目に入ったものを写真のスライドショーで紹介していった。一日に５本しかないバスのバス停，道端に放置された壊れたバイク，ホーロー看板，ゆずをくれたおばさん，バイクに乗ったおじさん，すべてが学生にとっては新鮮であることを説明した。「*街ではみかけないものに気付きました。私たちには，都会には無いものが魅力的なものに映ることがあります。たとえ，それが古臭いものであって，さびていたとしても。惣郷の人たちが当たり前のように思っているものでも私たちから見れば面白みを感じることもあります。また，それらのものが集落の独特な風景を創り上げると思います。*」（経済学部３年金賀隼介）

そして，学生たちはこんなに多くの人々が集まるとは予想していなかったため緊張した面持ちで，自分たちの心境を話した。「*集落を歩いていたときはじめて，惣郷集落の方と，かしこまったかたちではなく，お話をすることができたのですごくうれしかったです。その場で，ゆずをいただきました。ゆずですが，母が料理で使ってくれていたのかもしれませんが，あまり意識したことがなかったなと思いました。*」（教育学部４年井上知磨）「*僕は都市出身なので，最初は，いなかはあまり好きじゃないと思っていたのですが，惣郷集落に来て，きれいな海やおいしい料理，人の温かみや優しさに触れて“いいな”と思いました。いつかわからないけど，またいつか来られたらいいなと思いました。そういう気持ちの変化が起きました。*」（教育学部４年峯卓也）

惣郷集落の神楽舞

学生たちの発表を聞いて，研修員は，「*若者の視点でみてみる。その中で，工場や産業を招く「開発」が必要なのか，「維持」することが必要なのかという貴重な意見を投げられました。エコシステム，素晴らしい環境を考えて維持することが大事。私も同じようなことを考えました。都市に住んでいる若者のいなかに対するイメージはそれぞれなので，みなさんがこれから伝えていってもらえたらと思いました。*」（ムフニュ，ケニア出身）とコメントをしている。第６章で示した通り，企画の軌道修正を学生自らが行い，できる範囲の中でメッセージを伝えるという姿勢に賛同した意見であった。

惣郷集落の総代である茂刈克己さんは今回の取組に関して，「*今，惣郷集落で平平凡凡とやっていましたところに，突然，黒船がやってきましたから・・・。やはり，“井の中の蛙，大海を知らず”ではないですけど，動機づけとなりました。やはり，外からくる刺激も時々は必要ではないかなと思います。自分たちの故郷を見直す，そして良い方向へ進めたらと思いました。*」と述べている。そして会も終了し片付けを始めようとした時に，茂刈接佐さんの最後のひと言があった。「*あの，変なことをいいますけども，私は，惣郷集落に生まれて75年。今年，75歳。今年，初めて，この会合に参加させていただきました。外国の人，若い人，学生さんと私は孫のよう*

な世代ですけど。50歳以上も違う年齢差で，みなさんと理解し合うことはできんかもしれませんが，こういう会合を今後も開いていただいて，こういう地域の農山漁村の活性化を考えていきたいと思います。今日は，本当に，ありがとうございました！」その後，研修員と学生が集落住民と握手をして別れを惜しんだ。

惣郷集落は筋書きのないストーリーであったが，これらの交流を通して生まれた芽が今後どう展開していくのか見守る必要があるだろう。集落再生プロジェクトでは，まず集落が住民にとって何たるものなのかを理解する必要がある。それは，教科書にも書かれておらず，本を読んだり議論したりするだけでは不十分であり，フィールドに行き，地域の住民と話して，初めてみえてくるものである。

ザンビアからの研修員ベニーさんが「*ザンビアと日本を比較しますと日本の方が発展していますが，ひとつ共通することをみつけました。帰属意識，所属意識，集落のひとりのメンバーであるという意識が共通していると思いました。よそ者の私がここに入っても，その意識があることはわかりました。*」と述べているように，阿武町で研修する重要な意義がここにもあるのではないだろうか。

8.4　予期せぬ波及効果（宇田地集落）

11月の研修においては，新しいスタッフが加わった。新規定住者の上沢敦子さんと晃慶さんである。上沢さん夫婦は，2005年12月に阿武町に公営住宅に引っ越し，2007年６月に宇田地集落の一軒家に住むこととなった。その後，子供（上沢陵）を授かり，集落では18年ぶりに子供の誕生となったのである。

上沢夫婦は，阿武町で生活をしながら，「*私たちにも町のためになにかできることはないか*」と考えるようになったという。そこで，JICA研修の実務コーディネーターを敦子さんにお願いすることとなった。リーダーシップや交渉事も重要であるが，実施にあたって重要な役割は事務局である。これまでは，役場経済課の高橋さんが行ってきたが，他の公務との並行となるので負担が大きすぎ機動力が乏しいこと，民間主導の体制をつくる必要があることから，敦子さんが担当することとなった。

宇田地集落での昼食会

試行錯誤の中で，敦子さんは役割をどんどんとこなしていった。そして，ただ役割をこなすだけでなく，積極的に企画提案を行うようになった。JICA研修のプログラムがほぼ決まりかけた直前に，敦子さんからの相談があった。「*11月15日に私たちの集落のお祭りがありました。神事の後の通夜（食事会）で，今回JICAが研修に来られる話をしました。“必要ならば集会所を使ってください”とか“お手伝いがいれば言ってください”とみなさん言ってくださいました。そこで，間際になっての提案なんですが，27日の昼は，宇田地婦人会で食事を出していただくというのはどうでしょうか。場所は，宇田地集会所。地元の手作りの食事の方がJICAの方も喜ばれるのではないでしょうか。食事をしながら交流し，そのあとディスカッションをするかたちはとても良いと思います。*」

敦子さんは途中から参加したため，雑務ばかりで，敦子さんの企画がひとつもプログラムの中に入っていなかった。そう気付いた推進協議会は，この提案をすぐに採用した。

矢次京子さん，吉岡めいこさん，山本恵美子さんを中心に準備がすすめられた。そして，当日，宇田地集落代表の矢次武文さんが，英語での挨拶を行った。よそ者を迎える際にはそれなりのもてなしをするというのが集落の誇りと捉えられる一面であった。全体でわずか１時間であったが，自慢の手料理を食べながら各テーブルで交流をはかった。

JICA研修の状況は地元のケーブルテレビで放映され，町内に知れ渡っている。惣郷集落の様子をＴＶ放映でみた宇田地集落の住民は「*私達も食事だけでなくあのようにやりたかった。研修員さんたちの国についても聞きたかった。集落再生，過疎問題も話し合いたかった*」とのコメントがでてきたように，積極的に交流を図っていこうという姿勢がうかがえた。

また，波及的効果として，このような企画を敦子さんがもちこんだことで，敦子さんと集落住民の距離も縮まった。「*今まで，私たち受入側は，来た人たちにとってどういう手助けが必要かということを聞かなかった。定住促進はいいことだけど，２年の資金援助（就農の場合）が無くなった後も生活できるよう考えていかなければいけない*」と，この研修がきっかけで初めてこういう話をすることができたと敦子さんは語る。

8.5　研修員の発表

11月28日は，役場の会議室で研修員が阿武町に対して地域づくりの提言をする日であった。１年前の発表には，住民６名（うち中学生２名）のみの参加であったため，今回は何人集まるかが心配事のひとつであった。「*ここで，強制的な動員をかけてしまっては，自発的住民参加という本来の趣旨に反する，呼び掛けはしてあるので，あとは自主的に何人が集まるか*」というのが推進協議会の狙い及び願いであった。そして，午前10時開始時間には，役場職員をはじめ，郷集落の西村良子さん，道の駅の林克亮さん，河野幸彦さん，惣郷集落からは茂刈克己さん，藤村京子さん，藤村静枝さん，堀山清子さん，安光馨子さんが出席した。

道の駅プロジェクトのＡ班は，道の駅「田万川」と阿武町との比較を，運営，経営，施設，広報の指標に分けて分析をし，改善点を指摘した。そして新たな敷地利用方法として，緑化をコンセプトに公園施設や彫刻の建設，子どもの遊び場や休憩所を設置することを提案した。

次に，集落再生プロジェクトのＢ班は，阿武町の強みと潜在力を指摘した。美しい自然資源，インフラ整備，住民の助け合い精神，心温かく親切な人々，健康で新鮮な食事，文化と伝統の保存が強みとして挙げられた。今後の課題として，相互扶助の強化と，地域資源による活性化，より一層の宣伝活動や阿武町内外との連携を指摘した。そして，最後に，短期間の滞在での提言には限界があり，私たちはいわば「風」のようなものであるため，これらの見解をどう活用するかは阿武町が考えるべきだと述べた。

９　阿武町が考える：成果と課題

9.1　成果と課題

以上，阿武町の国際協力事業の2008年の一連の経緯をたどってきたが，最後にこれらの成果と課題を整理しておきたい。

2008年のJICA研修について，７月研修後と11月研修後の反省会における議論をもとに，まず，全体的な成果と課題をまとめ，その後，プログラムの内容，実施体制，依頼側との連携の３つの視点から整理する。

9.1.1　全体的な成果と課題

一連の経緯を整理すると，阿武町全体で取り組んでいるようにもみえるが，JICA研修に対しては，少子高齢化，過疎化が進むなかで国際協力が地域の喫緊の課題にどれほどの効

果があるのかが曖昧で，受入にかかる時間や労力などの負担が大きい反面，地元への還元が明確ではないことなどから，阿武町内でも一部の住民参加に留まっているのが現実である。

2008年においては，少しずつ面的な広がりがみられるようになった。町長をはじめ町会議員，役場の各課との交流の場があったこと，保育園，小中学校（福賀地区）などの教育機関は定番となっているが，新しく奈古高校が参加したこと，医療・保健・福祉施設が入ったこと，そして，郷集落，惣郷集落，宇田地集落という集落単位での取組に発展したことは大きな成果であったといえる。

国内外問わず，農村開発・発展を考える際には，地域の社会構造を把握する必要があり，それらは目に見えるものではないが，住民の行動を大きく左右する力をもっている。日本の農山漁村の場合，特に集落の機能は看過することはできない。閉鎖性という悪い意味に捉えられることもあるが，現在，全く閉鎖された社会など存在しないし，集落の閉鎖性は連帯の強さの裏返しであり，閉鎖性ゆえに守られてきた地域の文化・相互扶助等が，今，見直されているのである。ゆえに，地域性を配慮しながら開発・発展プロジェクトを実施しなければ，持続可能な開発・発展などあり得ない。「持続的農村開発」を謳うコースの研修員には，このようなソフトアプローチの重要性に気づいてもらいたい，そして，各国の活動に還元してほしいということが阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会の願いである。

多くの場合，外部の人を受け入れて研修を行う際には，成功例ばかりを見せる傾向が強い。阿武町の特徴は，悪い部分も含めてそのままを見せるところである。農事組合法人うもれ木の郷の田中敏雄事務局長が７月の研修の際に，「*昔は皆で助け合って農業をしていたが，機械化が進んだことで，助け合いが寸断されムラの良さがなくなった。今，法人という形で協働のシステムをつくり，昔のような農業を取り戻そうとしている。皆さんの国では，農山漁村の助け合いの精神を忘れずに農業を続けていってほしい*」（JICA2008c）と研修員に語りかけていたように，相互扶助的な要素を残しながら，発展・開発していくことの重要性を日本の経験は示唆している。阿武町の３つの集落（郷集落，惣郷集落，宇田地集落）の取組は，引き継がれてきた相互扶助をテコに地域振興へつなげる糸口を示したといえるのである。

9.1.2　プログラムの内容について

表３，表４は，2008年持続的農村開発コースのプログラムの内容である。プログラムの内容は，阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会がたたき台を提案し，JICA筑波と議論しながら調整していく過程で決まってくる。

スケジュールをみると，いろんなところを訪問してほしいという阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会の意向は理解できるが，研修員にとっても受入側にとってもかなりハードな内容となっている。特に，11月の研修では，少人数グループに分かれ住民との触れ合いを増やすために，２つのプロジェクトを実施したが，その分，受入側の業務量がかなり増加した。

最後の研修員の発表では，昨年よりも地元参加者が増えた。しかしながら，その内容は，それぞれが発言するのみにとどまっており議論には至っていない。ここから町内部の議論につなげる必要があろう。また，研修最後の研修員の提案は，地域への貢献を意図していると思われるが，研修員が提案する内容は，すでに町内外から指摘されてきたことで，新たな指摘とはいえない。提案型の発表というよりも，研修員の本音を話してもらう場の創出など，別の方法を検討する必要がある。

9.1.3　実施体制について

実施体制は，阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会が受け入れるという形態であるが，推進協議会のメンバー20人程度のうち，実質動いているのは10人程度である。

今後，JICA研修の効果を推進協議会および住民にもっと認識してもらう必要がある。効果は，無形なものと有形なものがあり，それをどう表わし，住民に伝えるか，阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会の手腕が問われるところである。

そのためには，研修の場所がなぜ阿武町なのかという意義を阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会がきちんと認識する必要があろう。阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会の年間行事を整理して，JICA研修と他の行事とのそれぞれの位置づけをする必要がある。

たとえば，JICA研修の効果のひとつとして，派生的にかかわってくる日本人との関係がある。研修員同様に共に笑い，涙を流し，考えた都市在住の日本人との関係をどうつなぎとめるのか，阿武町のサポート町民としてどう位置づけるのか。今後，継続的なシステムの構築が課題となろう。

9.1.4　受入側（阿武町）と依頼側（JICA）とのよりよい関係を目指して

「地域が学ぶJICA研修」という方向性は徐々に見えてきたが，「双方向の研修」という意味では，「住民のため」と「研修員のため」（研修員の問題意識，置かれた立場，満足感，疲労度合いも考慮）とのすりあわせをしながら，より良いものにしていく必要がある。そのためには，研修員に関する情報を受入側がもっと把握しなければならないだろう。研修員は，筑波大学ではどのような勉強をしていて，どのような研究テーマで論文を書いているのか。母国ではどういう仕事を担当し，どのような文化で生活し，どのような食を好むか。このような情報があれば，これまで以上に受入側は，物質的および精神的の準備ができるだろう。

さらに，重要な点は，契約面や費用面である。様々な外部団体との交渉では，いなかはコストが低いと思われがちであるが，いつま

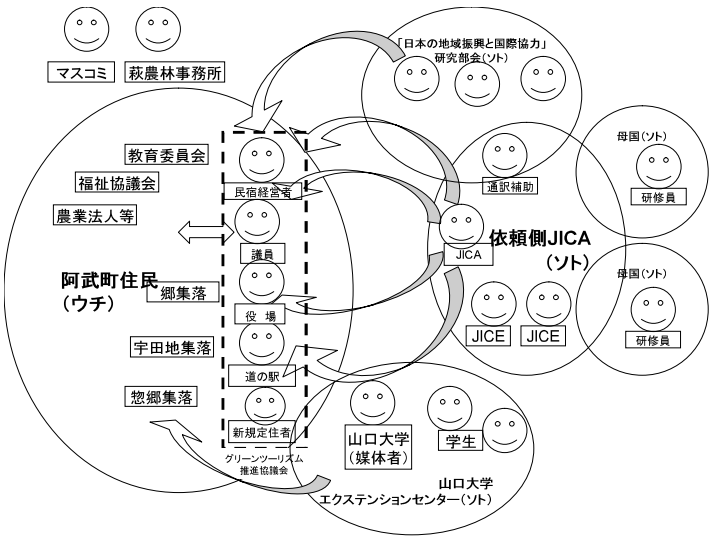

図1　JICA研修にかかわるアクターたち

でもボランティア的な対応に依存していては，受入側の持続性は保証できない。第１章の問題提起にもあったように，最悪の場合には，地域が疲弊してしまう可能性もある。JICA研修で経済的な効果を得るためには，受入側の事務体制を固める必要があろう。2008年のJICA研修においても無償サービスに依存せざるを得ない場面がいくつかあった。今後は，各担当者窓口を明確にし，公的な交渉および契約を通して，Win-Winの関係を作っていくことが望ましい。

また，現時点では研修がはじまって２年目であるため，研修員が学んだことが母国でどのようにいかされているかに関するフィードバックはされていない。「*阿武町はすごい，地域資源があり，たくさんのことと学んだ*」とどれだけいわれても，それが実証されない限りは阿武町民の納得は得られないだろう。今後は，フィードバックの方法も検討する必要がある。

9.2　土，草，風の人—それぞれの役割

地元学では，地元の人を“土”の人と呼び，よそ者を“風”の人と呼ぶ。JICAの研修員も，国際開発学会会員や山口大学教員・学生，JICA関係者などの日本人も，“風”の人であり，そこには様々なタイプがあることがわかる（図１）。

JICA研修の通訳補助として１週間阿武町に滞在した澤池さんは，「*外から見れば同じ阿武町なのに，阿武町内ではよその集落を“ソト”と認識していることを知り驚きました。しかしながらその“ソト”に対する態度は，アフリカや東南アジアからの“よそ者”には意外にオープンなものでした。それは，研修員は遠いところから吹く“風”であって，近くに住み常に隣人である“土”のよそ者と比べると，しがらみが少ないからでしょうか*」と，それぞれの立ち位置の違いを指摘している。

風の人は，意外なものの見方を提供する効果をもっているが，必ずしもよい効果ばかりではない。JICA研修の持続的農村開発コースについては，山口大学の教員（筆者）が媒体となっているが，でしゃばる傾向があるため，受入側の主体性を阻害する可能性がある。本来ならば，JICA筑波と阿武町の直接的な交渉により，事業が進められて，阿武町が自立・自律の道を歩むのが好ましく，媒体者はオブザーバーとしてより良い方向に促す役割を担うべきであるが，介入しすぎている傾向がある[11]。風の人は，流動的にベストポジションに位置するよう心がけなければならない。

新規定住者の上沢敦子さんは，「*私たちは定住しているから風の人ではないけど，土の人でもない。強いて言えば，風に吹かれて飛んできた種が土地で芽を出した草，“草の人”だと思います*」と言っているように草の役割を認識している。惣郷集落の藤村京子さんも，嫁いできて数十年が経つにもかかわらず，“草”の人として奮闘している。

さまざまな“土”の人，“草”の人，“風”の人が交わり，互いを知り，語り，それぞれの役割を演じていく。白松会長は，「*JICA研修を引き受けるにあたり多くの方に色々な役を引き受けてもらった。その効果としてあげられるものに“役を与えられたことによる人の成長”があったと思う。この方たちは，今後，多方面に向けて地域活性化の牽引車となっていただけると思う*」と話している。

阿武町という舞台には，徐々に個性的な役者が増えてきた。今後，展開するドラマに期待したい。

【付記】

本研究は，阿武町の中村秀明町長をはじめ，阿武地域グリーン・ツーリズム推進協議会白松博之会長，茂刈達美副会長，阿武町役場，農家民宿「樵屋」，漁家民宿「浜の小屋」，

農家民宿「一服庵」，漁家民宿「いかり」，惣郷集落，惣和会，郷集落，睦笑会，奈古連合船団，宇田地集落，阿武町道の駅，農事組合法人うもれ木の郷，みどり保育園福賀分園，福賀小中学校，奈古高等学校，福賀診療所，阿武町社会福祉協議会など阿武町の方々の暖かいご支援のもとに成り立つものです。また，JICA筑波，JICE筑波支所，国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会にもお世話になりました。なお，本稿執筆においては，㈲エクシディアコンサルタントの澤池多恵子さんからご協力を得ました。この場を借りて，みなさまに改めて御礼申し上げます。

（エクステンションセンター　准教授）

【参考文献】

藤城一雄，2008，「日本の地域振興への国際協力の可能性」『国際開発学会第9回春季大会報告論文集』，157-160。

国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究部会，2009，『阿武町ツアー文集　いなかに帰る』。

国際協力機構（JICA），2008a，『国際協力機構年報』。

国際協力機構（JICA），2008b，「特集　まちづくりと国際協力　地域を元気にするきずな」『Monthly JICA 2月号』，2-24。

国際協力機構（JICA），2008c，「地域も学ぶ双方向の国際協力」『Monthly JICA 9月号』，30-31。

松井範惇・辰己佳寿子，2006，『いなかと出逢う』国際開発学会第7回春季大会実行委員会。

水野正己，2008，「国際開発学会第9回春季大会セッション報告　セッション１：日本の地域振興と国際協力」（国際開発学会ニューズレター）

農文協文化部，1999，『西海に浮かぶアルカディア小値賀』農山漁村文化協会。

佐藤寛，2007，「このままでは誰も海外からの研修を受け入れてくれなくなる」『国際開発学会第8回春季大会報告論文集』，148。

辰己佳寿子・藤城一雄，2008，「山口県の地域振興と国際協力（1）－阿武町の事例から・・・いなかに集う」『大学教育』第5号，228-240.

辰己佳寿子，2008，「日本の地域振興と国際協力における媒体者の関わり方」『国際開発学会第9回春季大会報告論文集』，157-160。

辰己佳寿子，2007，「むらまち交流における見えない摩擦」『国際開発学会第8回春季大会報告論文集』，157-160。

辰己佳寿子，2006，「『道の駅』の多面的機能と住民参加型地域おこし－山口県阿武町の事例を中心に－」『国際開発学会第17回全国大会報告論文集』，217-220。

矢島亮一，2008，「国際協力事業と連携した地域開発－他の地域と連携することで－」『国際開発学会第9回春季大会報告論文集』，160-164。

吉本哲郎，2008，『地元学をはじめよう』岩波書店。

【注】

1　本稿は，図１に示すように，筆者は，媒体者としての立ち位置で当事者性をもちながら阿武町の地域づくりにかかわっている。本稿はこのような立場で考察した記録であるため，主観から脱することが容易ではない。ゆえに，一個人のまなざしから，顔の見えるかたちのドキュメントをまとめていくという方法論をとっている。

2　「農村女性能力向上コース」は，いわゆる途上国の農村女性支援に携わる公務員，NGO職員などを対象とし，今日の日本の農村女性の活躍の基礎を築いた生活改善活動，農村女性起業家の活躍，男女共同参画への取組等について学ぶ研修である。

3　Council on International Educational

Exchange (CIEE)は，第二次世界大戦直後の1947年，途絶えていたアメリカとヨーロッパ間の学生交流再開を望む教育関係者の集まりによって設立された。ニューヨーク州法に基づく非営利法人日本代表部は，1965年（昭和40年）に東京に設立され，教育を通して国際交流を図り人類の相互理解を促進することを目的に活動している。
(http://www.cieej.or.jp/index.html)

4　JICAの本邦研修は，1954年からはじまり，日本で伝わる「知」を用いて途上国の人材育成や課題解決を後押しする技術協力の重要な手段となっている。毎年1万人近くの研修員を受け入れている（2007年度は9,785人）。これらの本邦研修は，途上国が共通に抱える問題をテーマとした「集団研修」，それぞれの地域が抱える特有の課題をテーマとした「地域別研修」，各国の要望に応じて設けるオーダーメードの「国別研修」などから構成される(JICA2008a)。

5　筑波大学のホームページを参照（ https://www.tsukuba.ac.jp/public/press/060727press-1.pdf）。

6　農林水産省第2回「農林漁家民宿おかあさん100選」に認定される（2008年）。
(http://www.ohrai.jp/okasan100/)

7　JICA筑波の活動についてはこちらのURLを参照されたい。
(http://www.jica.go.jp/tsukuba/)

8　財団法人日本国際協力センター（JICE)は1977年に設立された公益法人。外務省をはじめとする中央官庁，独立行政法人　国際協力機構（JICA）どの援助機関，大学，地方自治体，公益法人，企業，国際機関および外国政府などが実施する国際協力を支えている。

9　2008年8月長崎県小値賀町での聞き取り調査にて。なお，小値賀町の詳細は，農文協文化部（1999）を参照されたい。

10　2007年6月15日開業。女将は川口みき子さん。詳しくはこちらを参照。
(http://yanocutter.ninja-x.jp/)

11　よそ者である媒体者の関わり方については，JICA研修に関わらず，途上国の農村開発における日本人ファシリテーターの関わり方とも共通する点がある。プロジェクト等の期間限定でよそ者として関わる場合には，住民の主体性を尊重し，依存体制をつくらないように，よそ者の役割と限界を明確にする必要がある。この点の議論は別稿にゆずりたい。